

PHD LETTER

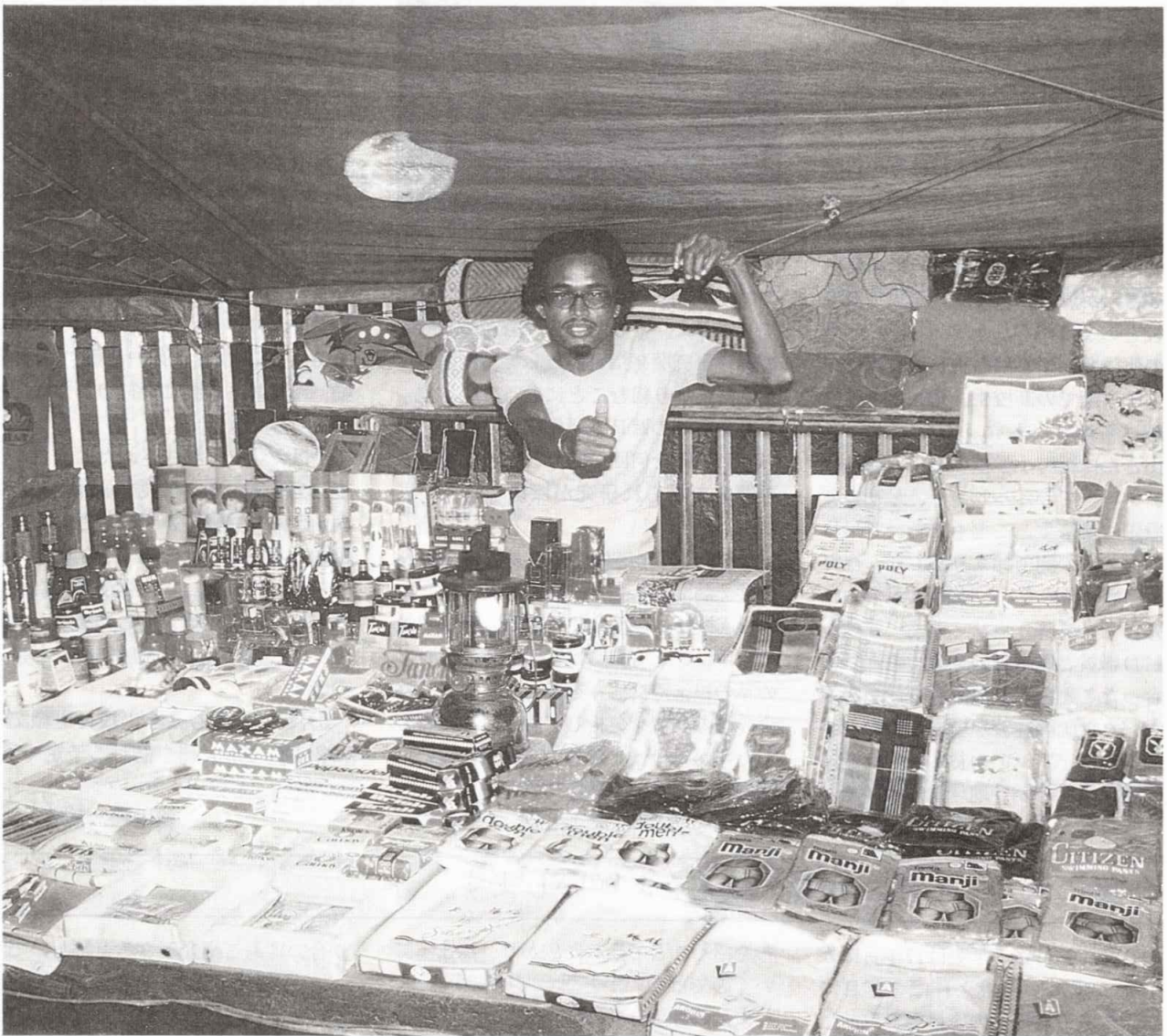
63

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1997・6

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- 地域に広がる交流～北九州…………… 2 P
- インタビュー～フィリピンの村で考えた貧しさ…………… 3 P

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：草地 賢一
住所：〒650 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
定価：100円



インドネシア西スマトラ州パダン

町の通りに軒を並べる小さな露店。
下着、ハンカチ、バスタオル、鏡、靴墨、
懐中電灯などなど、仲々不思議な品揃え。
メイドインジャパンはと見れば
あったあった、丹頂のポマードがありました。

草の根の人々を訪ねて

Report from Asia and South Pacific

西日本研修旅行で訪問する地域のひとつ北九州のひとつとの出会いを今回は報告します。

PHD運動が提唱された直後、西南女学院短大で音楽を教えておられた西沢さんは、たんば農文塾で一期生の研修生諸君と生活を共にされました。ご夫婦でPHD運動を支援し北九州に「アジアを考える会・北九州」が生まれた時も中心メンバーでいらっしゃいました。西沢さんのご紹介で西南女学院短大のチャペルトークを担当させて戴き10年以上になります。

「アジアを考える会・北九州」は夏にペシャワールで医療協力を続ける中村哲さんを迎え、冬にPHDと交流する。このような柱を中心にコツコツとNGO支援を続けて下さっています。この会に内山信子さんがおられ、彼女の努力で祝町小学校との交流が生まれました。

この他に北九州YMCAとの交流や、折尾女子学園での高校生、短大生との交流も続けられています。

内山さんは祝町小学校のPTA活動の中心メンバーでいらっしゃり、最初の交流の段階は研修生と子どもたち、PHD職員と保護者の間で始まりました。祝町へ年一回通い始めて4人の校長が替わられました。

PHD職員と保護者の交流で主として話し合ったことは①何故国際交流があるのか②どんな国際交流が望ましいのか③日本の豊かさやアジアの貧しさの構造④南北問題、環境という地球規模の課題の緊急性⑤日本とアジアの歴史的関係等で

新年度に入りました。会費の納入をお願いします。

この6月でPHDの活動は17年目に入りました。震災から数えれば3年目です。研修事業の規模、内容は震災以前に何とか戻りましたが、運営面では厳しい状況が続いています。

ここ数年の研修生招へい地域は、既に帰国した研修生が頑張っているところに重点を置いています。彼らに続く2世代目の人々を育てる手伝いをすることで、応援し続けていくという考え方のもとに地域を選び、また研修生を選んでいきます。人づくりは、すぐ目に見えて成果がでるというものではなく、時間がかかります。2代目、あるいは3代目の人々

した。そして、これらの交流を基にPHD運動への理解が深まってきました。

祝町小学校PTAとしてこの国際交流がまとめられ、それは文部省の賞を受けることになりました。

一方祝町小の子どもたちと研修生の交流は徐々に工夫改良が加えられ、教師の関心も深まってきました。私たちが訪問



96年度西日本研修旅行（祝町小学校）

するようになってから3人目の校長神谷先生は、積極的にこの交流の拡充に取り組まれました。そして、その努力は文部省の教育研究開発指定校として、現在学校をあげて取り組むことになっています。

私も恒例の西日本研修旅行の時の訪問以外に祝町を何回か訪れ、担当の教師も神戸まで来られ研究が深められています。

昨年11月、6年生のクラスを内山さんと共に訪問しました。研究授業でしたので神谷校長、教頭、担当教師など5人が見守る中、子どもたちは私の著作「アジアの草の根国際交流」を参考書にPHD協会の国際交流を分析していました。子どもたちからは、PHDの事務所に鋭い質問書が送られ、職員がそれに答えるという作業も経たクラスでした。その最後に

私は「君たちの取り組みは僕が大学で講義している内容より上だ。君たちの学びとそこから生まれる問いに先生やNGOの職員が答える。ここに文字通りの学問がある。」と激励しました。その時の子どもたちの誇らしい表情が忘れられません。

このように一人のPHDの協力者が掘り起こした草の根の国際交流は、いまや祝町小学校が位置する八幡東の地域にまで広がりました。毎年の小学校訪問の後夕方には地区の集会場に会場が移り、研修生と職員を囲んで小学生から中学生、PTAとOB、校長、教師、さらに地区の自治会役員までが手作りの持ちよりの料理に舌つづみを打ちながら本当に楽しい交流が続けられています。

さらに内山さんの思いは北九州全域にPHDの支援の輪を拡げようとふくらみ、彼女のボランティア活動などの場であるNTTのモニター活動、消費者運動、キリスト教会にPHDがつながりつつあるのです。

今はカナダに移住された西沢さんご夫妻、アジアを考える会の加藤さんご夫妻、内山さんご夫妻、いずれもこの交流の中核的なカップルが、PHD運動のメッセージとミッションを生活者の視点で生きられていく、そこからの発信が地域を豊かにしていくことを感謝のうちに思うのです。

5月31日、神谷さんの校長退職記念会に招かれて北九州を訪れる予定です。

総主宰 草地 賢一

地域に広がる交流～北九州

り合いにもご紹介下さると嬉しいです。

また3月には、96年度会費をまだ納めていただけない方に、会費継続のお願いをし、2割弱の方からご送金いただきました。何度もお願いすることになりますが、どうぞよろしくお願いします。



ちを招くことで徐々に広がり、深まっていくのではないかと考えています。

また研修生自身の学びに加えて、彼らとの出会いから日本人たちも、人づくりということの大切さを分かち合えると思います。研修生を招き、お世話することを通じて私達も成長していくのだと思います。

だから、PHD協会はアジア・南太平洋の地域から村の人々を招き続けたい、と願っています。

そして、この活動を継続していくための土台は、皆様の会費なのです。ぜひ、会員としてお支えいただくとともにお知

フィリピンの村で考えた貧しさ

おくにしまさき
奥西真幸

編集部（以下編）：フィリピンでのお話を伺う前にまずはPHD協会に足を運ぶことになったきっかけを。

奥西（以下お）：子供のころから自然が好きで、それが環境問題に関心を持つことにつながり、人が幸せに暮らす上での環境を考えるようになりました。それを地球規模でみると途上国に多くの問題があり、その開発に取り組んでいるところとして、親が寄付をしていたPHD協会に関心を持ちました。

編：途上国にある問題といえば貧困があり、そこから多くの問題が起こっていると思いますが。

お：そうです。でも私は実際に途上国に行ったことがないので、その貧困がGNPが日本の何分の一であるとか、カロリー消費がいくらであるとかという統計上の数字やメディアを通じた映像でしか知らず、不十分と感じてました。そんなおりの今回のフィリピン比較研修のことを聞き、同行させてもらい自分の目で見てみたいと思ったのです。

編：実際に訪れてどうでした？

お：行く前の思いが行っててから大きく変わりました。マニラの北にあるヌエバエシーハ州ガバルドンの村について、私は肩透かしを食らったという気がするほど貧しさというのを感じませんでした。私の目に映った村人の生活は質素でしたが、豊かなものだと感じたのです。静かで、ゆったりとした時間が流れる、日本の生活にはない豊かさを感じ、その印象がすべてを圧倒していました。

編：というところに貧しさはないのですか？

お：いえ、時間が経つにつれ「貧しさ」が見えてきます。例えば電気、ガス、水道など日本では当たり前のものでありません。生活用品も少ない。日本での生活からすれば貧しく感じるものの、これは主観的な貧しさではないかと考えるようになりました。

編：そのところを具体的に聞かせて下さい。

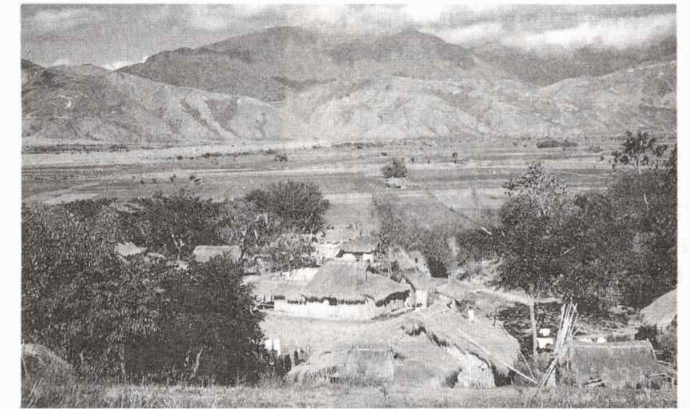
お：水道がないというのと、安全な水がないというのと比較でわかりますか？水道がないと不便ですが、近くに井戸や川があつてきれいな水が容易に手に入ればそれは貧困ではない、ところがそれを確保する周囲の自然、例えば山の木々の減少で水の供給が減る、また農業の近代

化に伴う農薬の使用などで汚れてきたとすれば、そこにあるのは生活に必要な水が手に入らない絶対的な貧困と言えるのではないのでしょうか。

今回の訪問ではそこまでの状況に至っているようには思いませんでしたけど。

編：ではこの村で見た貧困は何だったのですか？

お：すぐ見えるというのではないのです



が、例えば質素な村の生活の中に驚くほどインスタントコーヒーやソフトドリンク、缶詰が浸透しています。それらを手に入れるには現金がいります。村の抱える問題を考えるとそれらを買うぐらいならもっと別の必要なものを私は思うのです。さらにソフトドリンクやガムなどは虫歯のもとになるわけですが虫歯を防ぐための情報は少ないです。専門の歯医者は村の周辺にはいません。モノ、サービスの入り方がとてもアンバランスなのです。これらのギャップにこの村の貧しさの一端を垣間見た気がします。

それは直接的な貧しさというより間接的な貧しさともいうのでしょうか。村の人々の生活は日本を含めた世界の市場経済に驚くほど深く結びついていて、それは、食べ物で見えるような消費生活はもちろんのこと、農業など生産活動についても同様です。しかしそれは村人の生活レベルとかけ離れた存在であり、そこへの関わりは受動的で、つまり村の人々の意志に関係なく、このシステムに組み込まれ、そうせざるを得ない立場にある。そこに問題があるのではないかと。

編：そのシステムを感じた出来事はありますか？

お：村では有機農法への取組みも見られますが、主流は企業と組んでの玉ねぎの契約栽培でした。それは化学肥料や農業

一般企業に就職するも、開発関係の仕事への思いを断ちがたく、退職し現在そのための勉強中。この3月の14期生フィリピン研修に同行。

1969年生まれ。明石市在住。



を多用する近代農法であり、買い取られる価格も市場価格にリンクし、さらに品質検査も厳しいため、安定した、自立した農業とはいえないようでした。だからといってすでに現金収入が必要となる生活になってしまっているため、安全面ではいいとわかっていても経営的にリスクを伴う有機農法に切り替えることにはおそれはないかというのです。

編：他に気付いたことは？

お：山の森林の伐採による洪水の被害は、村の人々が協同して山を管理するシステムになっていないからとのことでした。そこはコーヒープランテーションになるとのこと。ここからも小さな農村であっても多国籍企業もかわる国際経済に組み込まれていて、そこには力関係の差から、村人の意志は通りにくく、多くの問題がそこから起きてくるのではないかと思います。

この解決は村の人たちによる問題の認識と取組みは言うまでもありませんが、その状況の片方にある私たちの側で、できることがあるのではないかと感じさせた旅でした。

研修生レポート

14 期 生

カイン・ソーさん
(ビルマ)

あい・ネパール・の会、藤田公美氏、中谷繁子氏、村木節子氏、上村律子氏、中林靖子氏（山口・下関市）～国際交流の会とよなか、葛西美紗氏、野村和子氏、清水せつ子氏、宮田くみ子氏、越水ユリ氏、国次照子氏、国次文子氏、林和子氏（大阪・豊中市、兵庫・宝塚市）～久保昌子氏（神戸市）～田中五郎氏、波賀みどり保育所、滝本善子氏、滝本照己氏、柴原幸代氏（兵庫・波賀町、一宮町）～淡路島モンキーセンター（兵庫・洲本市）～釜ヶ崎キリスト教協友会（大阪市）～帰国



久保昌子さんから話をきくカインさん

フィリピンの研修旅行を終え再来日してから、帰国後村の女性達とのグループ作りに役立つように、パッチワーク、刺しゅう等

フィリピン比較研修レポート

3月12日から20日まで14期生の3名はフィリピン、ヌエバエシーハ州ガバルドンで当会の海外協力団体のひとつであるSAFRUDIによる地域組織化の研修を受けました。研修後、ビドゥルさんとウピさんはそれぞれの国に無事帰国しました。

SAFRUDIはガバルドン内のいくつかの地域に農民、母親、若者のグループを組織していますが、今回の研修ではカルガンおよびパントックという2つの地域での活動を見学しました。

まずカルガンでは農民組織の集会に参加しました。この地域では玉ねぎやコーヒーなど大資本との契約による栽培が行われるようになってきており、農民の立場が弱くなるとともに農薬や化学肥料の多用による

の手工芸を集中的に学びました。ビルマでも洋裁のグループに所属しているカインさんは、飲み込みが速く、手芸も慣れているので、基礎的な技術をひとつひとつ学べば、自分で工夫していくことができると指導者から高い評価をいただきました。

また、帰国がせまってから、保健衛生、栄養の研修を少しずつまとめました。その一つとして、栄養士の久保先生からお話を伺いました。「ビルマと日本では食べ物や気候などの状況が違うので、日本で勉強したことをそのまま持って帰るのではなく、ビルマの状況に合うようにカインさんが工夫して下さい」という話に、カインさんは「そのまま持って帰ってもだめなのはわかるけど、工夫するのは難しいですね」と話していました。具体的な例として、日本では、赤ちゃんが早く大きくなるように6カ月頃から離乳食を始めますが、母乳を飲んでいるあいだは次の子供が生まれにくいので、避妊が普及しない所では、長く母乳を飲んでいた方が子供が生まれる間隔が自然に開くので、かえって良い場合もあるというお話に、なるほどどうなづいていました。

カインさんは6月4日に帰国しました。



ガバルドンの村人と話合うウピさん、ビドゥルさん、カインさん

環境問題がでていました。組織化の目的は農民を自立させ、有機農法によって環境に害のない、持続可能な農業を普及させることです。ビドゥルさんは「政府からの援助も少ない地域で、このような活動を行っていくのは難しいが、大変意義のあることだ

15 期 生

サビトリ・シュレスタさん
(ネパール)

サビトリさんのホストファミリーは、91年にスリランカのナンダナさんをお世話いただいた垂水区の上田さんです。上田さんになるとナンダナさんより日本語の上達が遅いということですが、4人の中では、今のところ一番たくさん日本語を話しています。サビトリさんが来日して一番驚いたのは、PHDのある元町商店街で男の人が掃除をする光景です。サビトリさんは「日本の男の人はよく働きますね。ネパールではあまり働きません」と話しています。



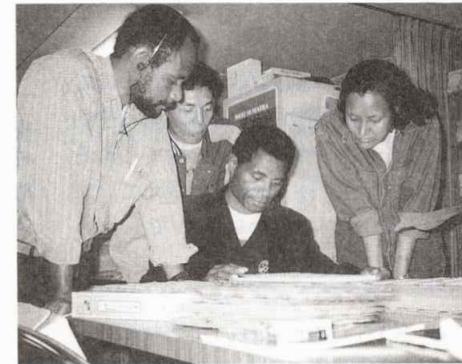
日本語研修は朝9時半から午後3時までの集中特訓

アンボン・クルワンさん
(タイ)

アンボンさんのホストファミリーである神戸市西区の小阪さんのお宅も研修生をお世話いただくのは初めてです。来日当初は日本語のまったくわからなかったアンボンさんとのやりとりで苦労されたと思います。小阪さんは、アンボンさんが、5月の連休で遊びに来られたおばあちゃんを大切にしたり、少ない水で上手に食器を洗うことに「教えられることばかりです」とおっしゃっています。



小阪さんの家族とつくるアンボンさん



出身地域のスライドに見入る15期の4人

ワニ・ソミさん
(パプア・ニューギニア)

今回、初めて研修生をお世話いただく神戸市西区の伊藤さんのお宅で、ワニさんは伊藤さんご夫妻を「お兄さん」「お姉さん」と呼んでいます。パプアニューギニアの主食はイモなので、1年間イモばかり食べるのかと心配していた伊藤さんですが、何でも「おいしい」とよく食べるワニさんにほっとされたそうです。



六甲山へのハイキングに参加された伊藤さんご夫妻とワニさん

ハリエオ・ゲオバさん
(パプア・ニューギニア)

92年に、ビルマのティン・アン・ウィンさんをお世話いただいた伊丹市の落合さんのお宅がハリエオさんの滞在先です。何かとたくさん人の集まる落合さんのお家では、休みの日もハリエオさんは、大勢の人たちとハイキングや市内観光に出かけ楽しく過ごしています。PHDから落合さんのお家までは2回乗り換えが必要です。一度間違えて大阪まで行ってしまいましたが、自分で戻って来ることもできました。

研修指導者会開かれる

毎年、研修生が来日してから現場での研修が始まる前に、主に兵庫県内の指導者の方々にお集まり頂いて、研修生の紹介と研修内容の検討を行っています。今年も、日本語研修中の5月2日、兵庫県西脇市で行いました。

82年から研修生をお世話下さっている渡辺省吾氏（兵庫県丹南町）からは、日本の技術をそのまま持ち帰っても、そのまま使えらるには限らないので、日本での研修から原理原則を理解した上で、研修生自身がどのように応用していくのが大切なのではないか、とアドバイスをいただきました。

サビトリさんは、編物、洋裁等の手工芸や保健衛生、栄養、保育を、村では自給自足に近い農業を行っているアンボンさん、ハリエオさん、ワニさんは小規模な有機農業を中心に、6月から専門の研修に出かけます。まずは、兵庫県内を中心に研修し、研修生、指導者の方々と相談しながら、研修のテーマをしぼっていきます。

!!!おめでとうの3連発!!!

3月ネパールに帰国したビドゥルさん。なんとびっくり、結婚しました。帰国前から家族が話をすすめていたようですが、相手の女性バルサさんに初めて会ったのは4月13日、6日後に決定、そして5月4日に結婚式という超スピード。前後にも儀式やパーティがあり4日間費やし盛大にお祝いしたそうです。日本からも滞在家庭のお母さんたちが参加しました。

めでたい話がインドネシアからもふたつ届いています。92年度研修生のハスマヤニさん（24）も結婚することになりました。6月26日、西スマトラ州のパシルバルー村で。お相手は同じ村の人。式には日本からも元職員の人がかけつけるとか。

さらに88年度のアフナルさん（34）も7月26日にペカンバル州の相手の女性の町で結婚の予定。4年前に学校で知り合ったやさしい人（本人談）だそうです。

